

「Happy Birthday Koichi Sawada !!」スタンフォード大学での研修5日目、私は生まれて初めて海外で誕生日を迎えていた。初めての海外研修で有頂天となっていた私は、すっかり誕生日を忘れていたのだが、夜のディスカッションで、日本全国から集まった精鋭たちよりケーキとプレゼントでサプライズの祝福を受けたのだった。スタンフォードでの夜はディスカッション終了後も「夜の検討会」?と称してさらに遅くまで続いた。共に過ごした仲間達との時間は自分自身を見つめ直し、人生においての貴重な経験をすることができ、今後の自分にとって大きな原動力になることは間違いない。本研修参加の最大の目的である精鋭たちとの出会いは十分に達成できた。

スタンフォードでのもう一つの目的は、最新の研究や施設を見て、聴いて、肌で感じることで自分自身の技術や研究のレベルアップの糧にしたいということだった。高磁場MRIの可能性やマルチモダリティ融合イメージングの今後の可能性を感じる講義は刺激を受けた。特にFDGとNaFの混合投与やDNAをターゲットとしたFLT、また痛みの程度を把握することができる分子プローブ開発についての講義は大変興味深いものであった。患者は痛みを感じてもこれまでの画像診断では所見を得られない。このような分子プローブが開発されることで患者のQOLを上げることができるという将来展望は、今後の臨床業務や研究活動へのさらなる意欲へつながった。

本研修での夜のディスカッションでは「日米の診療放射線技師の違い」および「診療放射線技師の国際的視野」について話し合った。アメリカでの技師の役割は研究と臨床と分かれている、また臨床でも業務に携わるためには技師免許のほかに専門分野のライセンス取得が必須であった。現地の技師と話す機会があったが、専門的なライセンスを取得した後も院内で定期的な勉強会を行いその専門性を深め、撮影に対しては症例ごとのプロトコルをしっかりと設定されていた。専門的な知識を得ずに撮影してしまうと、アメリカで起きたCT perfusion imagingにおける過剰照射のような事件につながってしまうとも話していた。日本では免許を取得後は全てのモダリティで働くことができるため、専門技師がしっかりと管理・指導していくかなければならないと感じた。一方で、マルチモダリティで業務できることは広い視野を持つことや柔軟な考えを持つことができる。日本独自のシステムを発展させることができれば良いのではとも感じた。そして、臨床と研究の両面に携わることができる日本の診療放射線技師は、臨床経験を元に発案したことを研究テーマとしたり、研究成果を臨床へフィードバックしたりすることができるすばらしい環境にあることを実感した。

本研修で、日本の技師は米国の技師と比べて決して劣ってはいないと感じたが、自分を含め海外へ向けた情報発信が少ないとと思う。日本で行っている活動を海外に発信することは、海外の情報を得ることができる機会でもある。海外からの影響を受けない分野ではなく、われわれ診療放射線技師も国際的視野を持っていかなければならないと身をもって感じた。

本研修では驚きと発見の毎日で本当に刺激的な1週間を過ごしてきた。この濃密な時間を忘れることなく臨床業務や研究活動の糧にしていきたい。また、モチベーションの高い仲間たちとは今後とも積極的に情報交換を行い、互いに刺激し合っていき、国際的な診療放射線技師を目指して日々研鑽を積んでいきたい。

最後に本研修に際して多大な尽力いただいた日本放射線技術学会、引率でご尽力いただいた北里大学の佐藤氏、スタンフォード大学、GEHC-Jの関係者の皆さんに厚くお礼申し上げます。また、本研修に快く送り出していただいた千葉大学医学部附属病院放射線部の皆さんに深謝申し上げます。



誕生日を祝ってもらった筆者(左)